「やりたいことがわからない」のはなぜか
――若者が直面する困難――

伊藤 賢一（群馬大学）

『〈私〉をひらく社会学』（豊泉周治ほか, 2014）にも載せたエピソードだが、数年前指導学生の一人から「自分のやりたいことがわからないので、どういうふうに就活をしたらよいか困っている」と相談されたことがあった。たいていは親の希望や友人・先輩などのアドバイス、大学の就職支援窓口からの紹介などがあって何とか就活に臨むものであるが、この学生は、親に相談しても「自分のやりたいようにしろ」としか言われない、と本当に困っている様子であった。

個人的にさまざまな事情があったのだとは思うが、社会学的想像力（Mills, Ch. W.）を働かせるならば、彼の悩みにはより大きな社会変動の影響を読み取ることができよう。あるいは、少なくとも社会的文脈に置いてみることで、現代の若者が直面している困難をかいま見ることができるのではないだろうか。

第一に、この悩みは「職業選択の自由」があるからこそ現実のものとなる悩みであって、近代社会が実現してきた自由化の意図せざる結果、あるいは後期近代に登場してきた個人化（Giddens, A.; Beck, U.）の顕れ、と解釈できる。われわれは誰もが自分の人生の「作者」として選択に次ぐ選択を、と同時にその責任を引き受けることを強いられてもいる。注意しなければならないのは、この「選択」は可能性でもあり強制でもある、ということである。近年の雇用環境や就職状況を考えれば、この「選択」は決してバラ色のものではありえない。

第二に、将来の夢や希望を育む人間関係の危うさを読み取ることもできよう。われわれがアイデンティティを確立し、自分の個性や傾向を見出していくことが可能であるのは、他者とのコミュニケーションを積み重ねていくことによってである。自分が何者であるか、どんな存在でありうるか探究し答えを見つけていくことは、青年期特有の、いわば普遍的な発達課題ではあるものの、現代社会の「歪み」がここに影響していると考えることもできる。さまざまな若者研究が示唆する関係性の変容は（浅野, 2006; 辻, 2006; 土井, 2008; 加藤, 2014）、現代に生きる若者たちの間に以前のような相互承認が成立しにくい状況を作り出している可能性を示唆している。

第三に、さらに状況を複雑にしているのはメディア環境の進歩とそれがもたらす意図せざる効果、といえる。原田曜平（2010）が指摘しているように、SNS の普及は若者たちの間にそれまで考えられなかったような持続的な相互監視状況を作り出している可能性がある。もちろん、原田の指摘するような新しい「ムラ社会」が成立していると即断することはできず、デジタル機器やネット環境をしたたかに使いこなしている若者も少なくないという指摘もある（boyd 2014=2014）。とはいえ、状況の複雑化は否定できない。

本報告は、いわば『〈私〉をひらく社会学』の続編であり、現代社会に生きる若者が直面している困難を社会学的に読み解くことを目指すものである。

文献

浅野智彦編, 2006,『検証・若者の変貌』, 勁草書房.

boyd, danah, 2014, *It's complicated: the social lives of networked teens*, Yale University Press. = 2014, 野中モモ訳,『つながりっぱなしの日常を生きる ― ソーシャルメディアが若者にもたらしたもの』, 草思社.

土井隆義, 2008,『友だち地獄 ― 「空気を読む」世代のサバイバル』, ちくま新書.

原田曜平, 2010,『近頃の若者はなぜダメなのか ― 携帯世代と「新村社会」』, 光文社新書.

伊藤賢一, 2014,「やりたいことがわからない ― 自由化／個人化の帰結」, 豊泉周治ほか,『〈私〉をひらく社会学 ― 若者のための社会学入門』, 大月書店, pp. 146-164.

加藤篤, 2014,「若者の〈つながり〉をどう考えるか ― 若者の友人関係に関する研究を手がかりにして」, 長田攻一ほか編, 『つながるつながらないの社会学 ― 個人化する時代のコミュニティのかたち』, pp. 108-133.

辻泉, 2006,「「自由市場化」する友人関係 ― 友人関係の総合的アプローチに向けて」, 岩田考ほか編,『若者たちのコミュニケーション・サバイバル ― 親密さのゆくえ―』, 恒星社厚生閣, pp. 17-29.